関連記事

令和8年2月17日（火）朝刊・夕刊
西日本新聞 20面（北九州京築面）

高度医療で「治療と仕事」両立

手術数増加、受け入れ態勢に課題も

産業医科大病院・山本副院長に聞く

北九州圏で唯一、「特定機能病院」の承認を受けている産業医科大病院（八幡西区）は、高度医療に力を入れ、患者の「治療と仕事」を両立させる病院として存在価値を高めている。2023年にオープンした急性期診療棟は稼働率が高く、昨年はがん治療のための高精度放射線治療装置「リニアック」1台を追加導入し3台態勢とした。山本淳考（じゅんこう）副院長（脳神経外科教授）に病院運営の展望と課題を聞いた。（座親伸吾）

導入された高精度放射線治療装置「リニアック」の特色を紹介する産業医科大病院の山本淳考副院長。奥の装置が回転して患者の病変に放射線を照射する

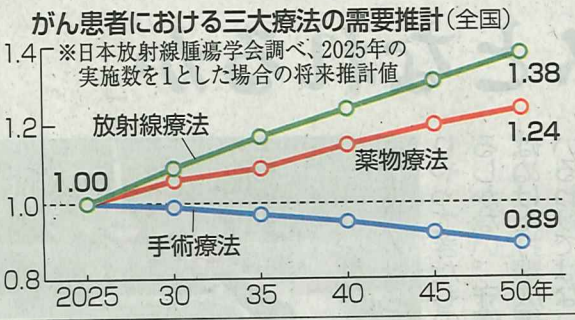
—リニアックによる最新放射線治療の特色は。

「放射線治療では、できる限り病変に正確に放射線を照射し、周りに当てないことが重要だ。例えば脳の場合、正常な部分に放射線が多く当たってしまうと、長期で見ると高次脳機能障害が出るリスクがある」

「リニアックは40センチ×40センチの範囲内であれば、たくさんある微小の病変に同時に当てられる。照射時間は5分ほど。手術に比べて患者の負担がすごく軽くなり、朝に放射線治療をしてそのまま仕事に行くことも可能だ。3台にはほぼ同じシステムが入っており、故障してもバックアップできる態勢になった」

—どのようながんの治療に適用できるのか。

「咽頭や甲状腺、肺、食道、胃、ぼうこう、直腸、膵臓（すいぞう）など。分子標的治療薬のような薬物療法と併用し、早期の段階で微小病変が見つかれば治療計画を立てて照射していく。日本放射線腫瘍学会の需要推計（全国）によれば、がん患者の三大療法の増減率は25年を1とした場合、50年時は手術が0・89と減少する一方で、薬物は1・24、放射線は1・38に伸びると見込まれている」



—最新設備を整えた急性期診療棟の手応えと課題は。

「ダヴィンチ（腹腔鏡手術の支援ロボット）やハイブリッド手術室などの最新設備が整った。手術件数も22年度までは6千件台だったが、24年度には8352件に増えた。一方で、病棟運営には課題もある。急性期病棟は『混合病棟』として複数の診療科でベッドを共有し、全体で患者を受け入れる態勢だ。しかし、平均病床稼働率が93・5%に上がり、時には満床になる。救急患者を受け入れられない状況は何とかしなければならない」

「当院での急性期治療が終了すれば、回復期リハビリなどを目的とした次の医療機関への転院などが必要であり、地域医療施設や医師会との強固な連携が求められる。医療の質を高め、かつ在院日数の短縮を目的としてクリニカルパス（診療計画表）の適用率を上げていく」

—物価高騰や人件費上昇の影響から、全国の病院で経営が逼迫（ひっぱく）している。

「24年4月から（経営改善の）外部コンサルタントが入り、洗いざらい問題点を出してもらった。各診療科もコストを下げる工夫をしており、病院長や事務方を含め協議して収支改善を図っている」

「年1回の地域医療連携会などを通じ、地域の病院や医師会の先生方と顔をつないでいる。加えて、がん拠点病院としてのがん治療、高齢者が多い地域なので脳卒中や心筋梗塞などへの医療に対応していくことが、世間に求められる大学病院の在り方だと考えている」

産業医科大病院　産業医科大は1978年開学、79年7月に大学病院の診療が開始した。病床数664床、医師数512人。2024年度の新規入院患者数は1万8054人。医療収入は303億810万円で増収傾向だが、コスト上昇で経常収支はマイナスが続く。23年策定の「キャンパスマスタープラン」で、50年までに病院本館を含め大学の主要な建物を段階的に建て替える方針。

リポート2026

（掲載について西日本新聞社許諾済、無断転載（コピー、スマートフォン等での撮影）禁止）

総務課 広報室